

続 櫻の木の下で (20)

阿木津 英



書きかけた池宮城積宝を中断して半年ほどになる。いいかげんに片づけておかないと、先にすすめない。今回、いったん素描的に書きつけておいて、のちに機会があればまたゆっくりと取り組んでみたい。

放浪の詩人というと、尾崎放哉や山頭火あるいは山崎方代のような詩歌人をすぐに思い出すが、積宝の「放浪」はすこし違う。そこには知的好奇心といったようなものが感じられる。他のどんな「放浪」の詩歌人も、知人友人の周辺からそれほど離れず、足跡をたどれば意外に狭いものだが、積宝の歩きは本人の言うごとく、「台湾から北海道の極、北斗星を頭上に仰ぐ所」まで、大日本帝国というものがどうという国土なのか、どういふ人々がどんな暮らしをしているのか、知り尽くしたいといったような動機の動いているのを感じる。もち

ろん、校長と喧嘩したあげく無断欠勤して旅に出るといったような衝動もあったには違いないが、いわゆる「放浪の詩人」と冠されるようなイメージによって積宝を見ることに、わたしはどうしても抵抗を感じる。

彼の「放浪」は、たんなる放浪ではない。古代から知識人が北から南まで西から東まで横断した、あの広い中国大陸の面影が背後に揺曳するし、さらに宮本常一がもったような好奇心いわば民俗学的好奇心がうかがわれる。

積宝は、中学生時代から柳田国男に関心をもっていた。大正十年二月から三月にかけて「八重山新報」に四回ほど連載した「忘れ得ぬ人々」のなかでは、柳田国男に新聞記者として会ったと記す。柳田は、この前年末から二月にかけて宮古島、石垣島へ渡り、那覇で「世界苦と孤島苦」という講演をした。積宝は、柳田国男を忘れ得ぬ人々のひとりとして、「美しい人格の放射に触れた悦楽」をこの連載第四回で描こうとしている。同僚の記者と旅館を訪ねた最初の印象は、「やはらかい明るい憂鬱」と云ふ様な芸術的気分だった」という。ほとんど心酔というに近い書き方である。

積宝が民俗学になかなか興味心のあることは、昭和六年に出版した『琉球歴史物語』を見てもわかる。出版元は、那覇の新星堂書房。印刷は熊本市の大同印刷株式会社。そのせいか、熊本県立図書館には収蔵されて、現在も現物を手に取ることができる。

表紙に「琉球歴史物語 上巻」とあるが、扉には「平易に書いた 沖繩の歴史 上巻 附遺老説伝」と記す。内容は「國の始め」「天孫氏」から始まる歴代の王の年代記に民間伝説を織り込んだものであり、いわば琉球の古事記・日本書紀、おそらくは尚家の歴史書か何か種本があるのだろう。原本は漢文だろうが、それを現代語に訳したもののようで、「平易に書いた」物語といっても決して幼い子どももの読み物ではない。本文の上部には頭注として、日本や西欧の歴史的事項を簡略に記し、世界のなかの琉球を俯瞰して理解できるような配慮がある。「序」に次のように言う。

わたし達の祖先はどんな生活をたどつて来たのだからか、わたし達の住んで居る此の郷土の山川にはどんな物語がひそんで居るであらうか、さう云ふことは誰しも知り度いことです。殊に此の小さい島々は一千年の間一つの独立した國家の形を持つて居ましたが、或時は三山に分裂して互ひに覇を争つてゐました。(略) 兎角、ひろくとした海原の中にまきぢられた数十個の青螺の上にこれだけの文化史があつたことは何人にとつても一つの驚異でなければなりません。チエンバレン、エドモンド、シーモン、パシル、ホール、ペルリ……さう云ふ遠い外国の人々さへ深い興味を以て此の島の面影を書き遺して呉れました。わたし達が此の郷土に生まれて、不思議なこれらの物語を知

らずには過ぎて行けません。著者はなるべく平易に沖繩の歴史を書き綴りました。

此の本の特徴は平易であることと民間の伝説を重視して権力の歴史としてより民俗の歴史を編まうとした所にあります。

当時、学校教育としては日本人として、古事記や日本書紀や万葉集を教え込まれたはずの昭和六年という時代にあつて、このような琉球の歴史書はどう迎えられたのだろう。下巻が出なかつたところを見ると売れたとは思えないが、当時の沖繩にあつてこのような書の出現はどんな意義をもつたのだろうか。わたしには判断がつきかねるが、少なくとも「権力の歴史としてより民俗の歴史を編まうとした」という、このようなものの方が、池宮城積宝の根底を久しく動かしただけは確かである。

積宝には、この年、八歳になる長男と三歳になる次男があつた。生活の場を同じにしなくても、いやそれだけにいつそ子どもたちに琉球の歴史を学ばせておきたいという思いがあつただらう。わが子のみならず沖繩のすべての子どもたちに、琉球の誇りを養いつつ、しかも世界史的なひろい視野をもって新しい世を築いてほしいという願いがあつただらう。そのような意図が明確に伝わってくる。

琉球の独立した國家としての誇りの回復が排外的なナシヨ

ナリズムに陥ることなく、日本・中国の周辺諸国や遠い西歐諸国や、世界の中に置いて、権力の歴史ではなくそこに暮らす人々のこのころの歴史として学ぶ——これは、現代にもなお通じる意義ある思想ではないだろうか。積宝はこれを、たんに机上の思想ではなく、柳田や折口が沖繩を訪ねたように、北海道から台湾まで、人々の暮らしの中に分け入って知ろうとした。自分の生まれ育った沖繩の民俗というだけではなく、それらを相対化しようとする視線がある。

いずこにも権力に無関係な人々の生活のあることを、文学として描き出しているのは、晩年に書いた『放浪記(その一)北海道の巻』と『(遺稿)放浪記』であろう。『池宮城積宝作品集』では、この二篇を「雑編」の中に収めているのが残念でならない。これはまぎれもなく創作意識の働いた文章であり、「小説」の項におさめるべきものであった。

札幌から十勝平野の帯広、十二月に入って室蘭港、そこで市役所に雇われて雪掻き人夫をし、アイヌの人と材木を転がし、或る郵便局では配達人をした。農家の草刈りがいちばん楽で、春の草が人間の背丈より高く茂るのを刈って帰り、馬に食わせる。「夜は囲炉裏にあたりながら家族の人達に講談やおとぎ話を聞かせると、とても珍しがって聞きとれた。その農家の人々の単純さに私はまた見とれるのだった」。

囲炉裏にあたりながら、自分は常夏の国から来たのだと話す積宝に目を丸くする農家のおとなや子どもたちを思うと

き、昔びとの心性といったものが胸に呼び起こされるような気持ちがある。

「放浪記(その一)」の北海道の巻は、「いきなり、天塩川に飛び込んだ」という一文から始まる。「監獄部屋」という語は一言も出てこないが、その天塩川沿いにあるタコ部屋から逃亡したのであった。

監獄部屋とは、上野、浅草、芝公園などの失業浮浪者の集まるあたりに「人夫募集。旅費小遣被服貸与。普通日給の二倍支給」という看板掲げる募集屋が立ち、好条件に釣られた失業者を北海道の果てまで連れて行って、囚人的強制労働をさせた土工部屋のことである。「北海道の道路網はもちろん鉄道の敷設、築港、治水、灌漑工事、または鉱山開発にいたるまで、官営、民営を問わずあらゆる土木工事は、監獄部屋の人夫たちの血と汗、酷使と死傷の上になしとげられたのである」(『日本残酷物語』)という。

積宝が北海道に渡ったのは諸説あるが、大正八年のことだと思われる。英語教師解職後の二月、八重山で父死亡の電報を受け取り、那覇に戻ったその後のことではないか。この年の春から夏にかけて北海道まで行き、食うに窮して人夫募集屋につかまったのかもしれない。天塩川に飛び込んだのは、十月であった。稚内の近くですでに相当寒かっただろう。

向かい岸にあがって少し行くと、草葺の一軒家があり、四十がらみの男が酒を飲んでいた。「よくまあ溺死しなかった」

と言ひ、まだ「そこら中はりが網を張つて」いると言う矢先から追つ手が搜索に来る。無愛想ながら親切にも男は匿つて逃してくれた。「若し、お前が熊を恐れずに、天塩山脈を縦走して向う側に出たら、助かるかもしれない」。言われたとおり、天塩山脈を六日間飲まず食わずでひとり歩いた。無事に里近くまで来ると、畑で五十四、五歳の婆さんが一人で馬鈴薯を掘っている。手伝つてやると弁当の塩鮭を出してくれた。夕方まで働いておかみさんと一緒にその家に行く、そこには子どもがたくさん集まっていた。

長い間、土方部屋の狼のようなあらゆる男にまじつてはたらき、子供を見なかつた私は子供達の体臭をかぐと、これは神の体臭だと胸深く吸い込んだ。傍に来た六才ぐらの小さい娘をだき寄せて「めんこいなあ。」と髪の毛をかぐと「出面取(労働者)の叔父さん、おかちいよ、おかちいよ」とびのいて笑いこけた。私はその笑い声をきいていると不思議に「救われた」と云う喜びの感激で涙があふれ出た。すると今まで凍結していた胸があたたかくふくれあがり、春の潮のような郷愁が湧き出して温かい涙が頬をあとからくくと止め度なく流れて行つた。

この二つの「放浪記」に描かれた北海道の人々の姿——「飛びつちよ」を匿つたやくざふうの男も、塩鮭をくれたお婆さ

んも、子どもたちも、積宝の筆づかいにわたしはここを動かされる。

*

広津和郎の小説「さまよへる琉球人」の中の、主人公が大切にしている自作の翻訳稀覯本を借りていったあと「もらつておきます」と一通の葉書をよこして行方不明になったOなる人物は、池宮城積宝がモデルであることは周知のことだ。もう一人登場する沖繩人見返民世にも、ものを売りつけられたり、さんざん迷惑をかけられるのであるが、主人公はこちらを憎まず、Oなる人物には立腹している。

この一件による風聞が、「奥間巡査」で入選したあとの積宝にとつて大きな痛手になつたことは推察できよう。

友皆に背かれし日は吾子を抱き頬ずりすれば涙おちたり
新垣美登子が、次男を孕んでいながら離婚を決意したのも、この風聞と関わりがあるだろう。この悪評がのちのちまでたたつたことは、登美子八十五歳記念出版『那覇女の軌跡』潮の会、1985)に寄せた川平朝申の、次のような文章にも明らかである。

私が民政府の文化部芸術課長時代本を借りに来られまして。それはまだ図書館の建物が完成してない時でした。伊

波普猷『おなり神の島』をしばらく貸してほしい、とのこととした。(略) 積宝さんは大変喜ばれて「この本は伊波さんの名著ですよ」と語り、妻の手料理で山小屋(私の宿舎)の昼食を共にしました。(略)

その後民政府の首脳のY氏が『おなり神の島』を貸りに来られました。積宝氏にお貸しした旨を語りますと「とんでもないことをしたね! 積宝に貸したら返ってこないよ。川平君、人を見てはなくてはいけません。全くもったいないことをした!」とつぶやいて帰られた。この戦争でもっと大事な物を失っていることを考えれば、積宝さんが持つていて下されば嬉しいことだと思います。

戦後の晩年まで、「積宝に貸したら返ってこないよ」と言われる信用の失墜ぶり、やはり生きづらいうことであつただろう。しかし、またごく少数ではあるが、川平のようなつくしい心持ちの理解者のいたことを思う。

広津和郎「さまよへる琉球人」は、小説として良いものではない。青年Oに対するのみならず、憎めない主人公の洩らすもう一人の沖繩人見返民世の描写が、まるで動物園の動物を見ているような視線にわたしには感じられる。

「さまよへる琉球人」という言葉は、青年Oの詩中にあると述べているが、広津はそれをこの小説の表題として冠すべきではなかった。「さまよへるユダヤ人」という連想をも

つこの語を、琉球人が自らいふときの痛みと苦悩とがまったく響かないままに、作家としての直観から軽い気持ちで題につかつたのだろうか、ヤマトの横柄さというか、奪つたものを奪つたという意識もなしに当然のようにわがものとする無神経さがそこにはある。

広津がこの小説を自ら発禁にしたとき、「さまよへる琉球人」という語を琉球人から奪つたのだということ、そのもつ痛みに気づいただろうか。

*

新垣美登子は、生命力旺盛な現世的エネルギーに満ちた人である。積宝に欠けたそんな現世欲旺盛なところが、かえつて救いとも、ときに刺激ともなつたのだろう。だが、美登子の方から積宝は見えない。肩書きも何も求めない生き方を理解できない。立派な業績を積み上げて世間に尊敬される人であれば尊敬できない。

ただ、子どもたちは美登子には内緒で、父親のもとを時々訪ねては夜おそくまで話して「お父さんは偉い人だね」と尊敬していたという。そしてお父さんに比べて「お母さんの書く文章には品がない」と評していたという。

「放浪の詩人」などと言われて、なかばあなどられている池宮城積宝を、その俗世間的な評価からいくらかでも救い出したくて、このたびの数回の文を弄したのであつたが、結局何の力にもならなかった。